
交錯『裏』逸話

永旅 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交錯『裏』逸話

【Nコード】

N1597G

【作者名】

永旅 真

【あらすじ】

交錯で超能力な一風変わった怪盗モノ、『交錯逸話』の裏を描いた短編形式のお話です。基本的にはコメディ、時折シリアスといった雰囲気となっております。本編を読まなくとも読めるようにしています。本編も読んでいただけるとより一層登場人物達が近くに感じられるんじゃないでしょうか。

裏話その一：下着一セット分のロマン

「ラ・イ・ブ〜♪」

学校の放課後。

待ち合わせ場所の校門前でライブに後ろから抱きつき、『後ろ頭に頬すりすり』攻撃。

「あ、そーちゃんたら…ふふ、よしよし」

前にまわしている私の手の甲をぽんぽんと優しく叩くライブ。

ああ、ライブの髪、シャンプーのいい匂い：

でもあんまりおもしろい吸っちゃうと嫌がられるかもしれないから、こっそりと嗅ぐ。

——私の名前は、鼓芽 そよぎ（つづみめ そよぎ）。

私は何者なのか簡単に言っちゃうと表向きは探偵、裏社会では本業である怪盗をやってる高校生。

そして今私が抱きついている女の子、歌羽 蕾譜（うたは らいぶ）も私と同業者。

ちょっと前までは私とライブで怪盗コンビとして活躍してたけど今は一時中断していて、さらなる怪盗としてのレベルアップのため、ある勝負をライブとしている。

それは私とライブが怪盗と探偵の二役を持って、私が怪盗の時はライブが探偵、ライブが怪盗の時は私が探偵として『怪盗が盗みをして、探偵がそれを止める』勝負。

なんで仲が良い私とライブが勝負をしなきゃなんないかって？

仲が良くてお互いの事を良くわかっているからこそ、怪盗としてお互いを高めあうため必要な事と思ったから、よ。

本気でやる勝負とはいえ、決して憎くてやってるんじゃないって事。

でもつい最近、ある異変が起きた。

ライブがたまたま事故から端鞘 凝人（はさや ことと）とい

う男性を助けた。

なんでも、学校の図書館で端鞘さんと会っていてなんとなく顔を覚えてたとかライブは言っていた。

その端鞘さんを助ける為について体が勝手に動いていたとも言っていた。

結果的に端鞘さんが私達の素性を知ってしまったため、否応無しに私達の勝負に巻き込む事になってしまったのだ。

オリヴィアニア・ツヅミメ、通称オリーヴって私の妹が私の手伝いをしたいと言ってきた事もあったため、私のチームメイトとしてはなく、ライブのチームメイトとして。

まあ彼自体裏社会でも生きれそうな技能を持っていたのは幸いだった。

端鞘さんはコンピュータの扱いに関しては凄いレベルまで到達していたのだ。

現在彼には、怪盗の仕事がこなせるように私の家の空き部屋に住まわせて研究に没頭させている。

当の本人もノリノリのように、私がそう指示する以前に私と同じ事を考えていたようだ。

まあ端鞘さんが怪盗としてではなく、ハッカーとして私とライブの勝負に首を突っ込んでたくらいだから、相当意欲がある人だとは思っていたけど。

それにしても、ライブは優しい。でもよく知らない人にまで優しいっていうのは…私的にちょっと不安。

まあ、それもライブの良い所の一つなだけだね。

「ねえ、そーちゃん。さっき話してた人がいたんだけど、駅前ケーキ屋で新作が出たんだって。今から一緒に行く?」

「え、本当?! うん、行く!」

「良かった。」

じゃあ凝人さんのおみやげにケーキの差し入れでも持っていこうかな。

あ、でも男の人って甘いもの苦手だったりするのかな…」

「…はあ」

ため息をつく、私はライブから体を離す。

「え？どうしたの、そーちゃん？」

「だって、ライブが優し過ぎるんだもの」

「え？」

「…何でも無い。」

ま、とりあえずおみやげは買って、端鞘さんが要らないって言った
ら私とライブで半分こすればいいじゃない？」

「あ、成程。そうだね。」

それと…何でも無いならいいけど、辛かったらちゃんと相談してね。
私達、パートナーなんだから、ね？」

「うん、そうだね。パートナーだものね。ありがと、ライブ」

「うん！」

そう言ってライブは眩しい程のとびきりの笑顔をする。

その日の夜は私とライブとオリーヴと端鞘さんの四人で夕飯を食べた。

だがその日ライブはウチに泊らず、ライブ自身の家で寝るそうだな
んでも、ライブが自分の家の掃除をしたい関係もあるとか。

でもお風呂だけとはと、ライブはお風呂をウチで済ます事になった。
お風呂には端鞘さんが一番先に入り、次にオリーヴが入る。

そして最後に私とライブが入った。

「ほらそーちゃん、こっちこっち。背中流して上げる」

「…うん。お願い、ライブ…」

やわやわ、さわさわといった優しい感じで私の背中を流してくれ
るライブ。

今の私は夢心地といった気分だ。

実を言うと、いまだに私はライブの裸を恥ずかしくて直視できな

い。

ライブはあまり気にしていない感じだが、私はどうにも変に意識してしまいちょっと挙動不審気味になってしまうのだ。

まあこればかりはどうしようもないんだけど。

そして、二人で仲良く湯船に浸かってさらに夢心地な私。

その数分後、事件は起きた。

プルルルル、プルルルル：

電話が突然鳴る。時刻は午後十時半くらい。

「はい、鼓芽です。：え？ライブ？」

コーヒークップ片手に受話器を立ったまま取った私は、声の主に驚いた。なんと、自宅に帰ったはずのライブからの電話だったのだ。

「夜分遅くにごめんね、そーちゃん」

「いって、いって。それよりどうしたの、ライブ」

「うん。それがね、そーちゃん家に忘れ物しちゃったみたいなの」

「忘れ物？」

何気なく問いかけてみる。

その後のライブの台詞が何か全く予想付かなかったから、こんな余裕の対応が出来たのだろう。

けれど、その何秒後かに私は大きく動揺する事になる。

「うん：そのね、そーちゃん家の脱衣所の籠に、下着忘れちゃったみたいなの」

ガシャーン。

「な、何?! どうしたの、そーちゃん! ? 今凄い音がしたけど…」

「ううん…なんでもないのよ、大丈夫…」

私は思わず、手に持っていたコーヒを落としてしまった。

「そーちゃんがそう言うならいいけど…着替えた後、お風呂入る前に着けてた下着をそのまま忘れちゃってたみたいで。

悪いけどその下着明日取りに行くから、そーちゃんの方で預かってもらえるかな」

ぽたっ。

床に血が垂れる。気がつけば私は鼻血を出していた。

預かってって、何?!

私がライブが数分前に着けていた、し、下着に触ってもいいって事ですか?!

ああ、いやいや、そうじゃなくて。

ライブは私を信頼できるパートナーとして、大事な部分を隠していたものを預ける…もとい、女の子にとって大事な…他人に見られたら恥ずかしいようなものを預けるって事だろう。

ならばその純粋な信頼を裏切るわけにはいかない。

「わかったわ、ライブ。私自身責任を持って預からせていただきますです、はい」

「うん。お願い、そーちゃん。…それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみ、ライブ」

私はカチャン、と受話器を置く。

…どうしよう。

いまだライブの裸も恥ずかしくて見れない私がライブ…の…し、した、下着を…預かるって?

私はコーヒークップの割れた破片を拾いながら思った。

だって、そんな…。

(…あ!!!!!!)

私はおもわずハッとする。

脱衣所の籠に下着を置き忘れたまま、脱衣所にある洗面台に歯磨きにも行った端鞘さんが、下着を見つけて…

あんな事とかこんな事とか。

「駄目っ！！！！絶対それは駄目！！！！」

思わず大声を出してしまう。

だがオリーヴが寝ている事を思い出し、すぐに黙る。

あの子まだ小学生だし起こしちゃったら可哀相だね。

とにかく、ここは可及的速やかに事態を收拾せねばなるまい。

ああ、もう破片拾うのなんか後々！！！！

ライブの下着がピンチなのよ！！！！

私はダッシュで脱衣所へと向かった。

「…お邪魔します…」

自分の家なのに何故こんなにかしこまってしまうのだろうか？

少し疑問に思いながら、脱衣所の扉を開く。

中は暗く、誰もいないようだ。

電気のスイッチをぱち、と押す。

心なしか、その音すら大きく感じる。

…なんか初めての怪盗仕事並に緊張してない？私。

とにかく、籠よね、籠。

えーと、どこだっけ？

きよろきよろと見回してみる。

そんな場所もわからないなんて…正直、オリーヴにばかり家事を任せるのも考えものよね。

オリーヴは私が怪盗と探偵をしていて忙しいだろうと、家事を手引き受けていた事があった。

今は探偵のS級ライセンスを取得して自分の時間が作れるようになってようやくオリーヴの手伝いをする許可をオリーヴから得た。

以前、私が一人で家事をオリーヴに断らないでやったらオリーヴは大泣きした。

私の仕事は気に入りませんでしたか、とかお姉さまにとってオリーヴは必要ないですか、とか言って。

まあ、これからはオリーヴも怪盗仕事を手伝うわけだし、家事も分担してする事にオリーヴも納得するでしょうね。

あの子は単に必要なとされたい思いで泣いた事があっただけで、家事をやらないと死ぬわけじゃないんだし。

まあ根がいい子だからこんなやりとりがあっただろうけどね。

ああと、今はとにかく、籠を探さないと…って、あった。

籠は、洗濯機の上に置いてあった。

（さあ…いよいよね）

ライブの下着をじっくりと見…じゃなくてチェック…なわけないでしょ!!

ライブの下着を回収する時が来た。

（どんなのだろう?）

ライブとお風呂に入る前、ちらっと見たのは白っぽい下着だったような気がしたけど。

レース?それとも柄はないとか?

リボンがついてたりして。

うん、ライブの可愛いイメージにぴったり。

まあ黒っぽいアダルトな下着を着けたライブも見たいけど。

いや、でも…

ぽたっ。

考えを巡らそうとした途中で私はまた鼻血を出している事に気付く。

いけないいけない。こんな事してる場合じゃなかった。

（では、失礼します…）

私は鼻血をハンカチで拭いながら、いよいよ籠を手に取り中を覗いてみた。

「…あら?」

ない。

籠の中には何も無い。

ない。ない。ないないない!!

籠をひっくり返してくつついているかどうかみたり、振ったら落ちてくるんじゃないかと思いきり籠を振ってみたりしたが、どこにも下着はない。

(…ま・さ・か)

私は端鞆さんのいる部屋へと向かっていった。

そして、その部屋の扉を見て気付く。

この扉は外側から鍵をかける事ができる扉で、食事を部屋の中に入れるための小窓もついている扉だ。しかも部屋の中には簡易洗面台もある。

しかも今は完全に鍵は閉まっている。

そもそも端鞆さんを逃がさないようにこの部屋に居させているので、外に出させる事なんてさせないようにしていたわけだ。

こんな状況でわざわざ脱衣所に歯磨きをしに行けるだろうか？

…迂闊だった。

なんでこんな大前提な事も忘れ、端鞆さんの事を疑ってしまったのだろう。

そう思うと、自分がとても憎たらしくなる。

でも自分を責めるのは後にする。

なにせライブの下着を見つける事が最優先なのだから。

それから家を一通り探した。

けど一向に下着は見つからない。

仕方がないのでとりあえず自室に戻り、じっくり考えてみる事にした。

私は椅子に腰掛け、腕組みをして頭の中を整理する。

…ライブが下着を忘れていたのは多分本当だろう。

ライブは家の中をくまなく探せている掃除という名目で帰ったわ

けだし。

ライブ程注意深い人もなかなかいないわけだし。

端鞘さんも完全に無実。これは確定事項。

となると、オリーヴ？

でもなんでオリーヴが？動機が見つからない。

それとも、別の誰かがこの家に？

だとしたら：いい度胸ね。

怪盗の家に忍び込んであまつさえ下着を盗める人？

：普通に考えればありえない。

普通に考えれば。

だが有り得ないなんて何処に言い切る根拠があるだろうか？

(だけど待って…)

ふと。

動機が見つからないと言ったが、それは正確には意識的な原因の事しか自分は考えていなかったのではないか？

動機というには二つある。

それは意識的な原因と無意識的な原因だ。

悪意が存在しない無意識的な動機：つまり、オリーヴはごく自然に、忘れていた下着の存在に気付き預かっていたのではないか？

そうすれば説明がつく。

何故なら一通り家を探したとはいっても、オリーヴの寝ている寝室へは行っていない。

寝ているオリーヴを無理に起こしたくなかったから。

だが憶測だけで何かがわかる事は少ない。

なにか確定的な証拠でもなければ裏付ける事は出来ない。
手がかりを探さないと。

あと、外部の侵入者の可能性も捨てきれない。

とりあえず戸締りはしっかりと。それから家を何回か見回りますしょう…。

ライブの下着がよくわからないような人に好き勝手されるのだけ

は防がなくちゃね。

見つけるまで決して寝ないわよ、絶対。

「うゝん…」

ん？

なんだか眩しい。

まぶたが重い。

そう思った直後、私は自分が寝ている体勢をしている事に気付く。それも布団が私の体にはかかっている。

「…ああああああああっ！！！」

私は叫んだ後、がばっと上体を起こす。

そして自分が置かれている状況に気付いていく。

今私がいるのは自室のベッド。

（…そっか。寝ちゃったんだ…私。見回りに疲れて、寝ちゃったんだ）

最低だな…私。

そう思った直後。

私は横から誰かに抱きつかれた。

「…そーちゃん…そーちゃんっ…」

ライブのすすり泣く声が聞こえる。

——私に抱きついてるのはライブだったのだ。

「…ライブ？なんで…？」

「う…うっ…うっ…」

私はわけがわからなかった。

なんで、ライブがここに？

それになんでこんなに泣いてるの？

「えっと…ライブ？」

「ううっ…もう、心配したん…だから…」

そうライブが言った時。ノックの後、部屋の扉が開きオリヅが

入ってきた。

そしてオリーヴは私をみるなり、一気に涙ぐんだ。

そして頭をばっと下げ、口を開く。

「ごめんなさい！！オリーヴが全部悪いんです！！洗濯すればいいのかと思って籠にあったライブさんの下着をお姉様の下着と思い、一緒に洗っちゃたんです！！」

「オ、オリーヴちゃん、それは違うよ！！そもそも私が不注意で下着を忘れなければこんな事にはならなかったんだから！！」

「えーと。ごめんなさい、二人とも。なんで今の状況になったか説明してくれないかしら？」

「どういう経緯かさっぱりわからないんだけど」

そして二人から事情を聞いた。

私はあの後家中を見回りに行っていた途中で寝てしまっていたらしい。

一方でお手洗いに起きたオリーヴが電話の前の血痕と割れたコーヒークップを発見して異様な空気を感じた。

それは見回りに没頭する私が片付けそびれていた鼻血と落としたコーヒーの成れの果てなのだが。

血痕は通常、血が落ちるまで距離がある程その広がりも大きくなる。

一般的にコーヒークップの欠片で指などを切った場合、拾うためにかがんだ人の指先と床の距離は大きく開かないから、当然血痕の広がりも少ない。

もっとも、指などを切ると痛みを感じて指などを押さえたり、傷がどれくらいのものなのかと様子を見たりするのが大体のパターンだから、血痕が落ちる事自体珍らしくはあるのだが。

だが今回のコーヒークップの近くにあった血痕は指などを切ったにしては広がりが大きかったのだ。

そしてオリーヴは私を必死に探し当て、緊急暗号通信を発する機械を使ってライブを呼び出し、私をライブとオリーヴの二人でベッ

ドまで運んだ。

そして朝になって今に至る、というわけだ。

肝心のライブの下着はオリーヴが家の洗濯物と一緒に洗いストーブで乾かした後、アイロンをかけてたたんでおいたのだ。

私も家への侵入者の事ばかり考えていて、自分の洗濯物の中にライブの下着が混じっている事まで頭が回らなかった。

「じゃあライブは深夜なのに私の家まで来たっていうの?! 電車なんて動いてないから、ライブの家からここに来るまで苦労したでしょうに…」

「あ、それは近所のビルからグライダーで滑空してショートカットしたんだ、怪盗服を着てね。グライダーから降りてからは念のため交通整備員に変装して走ってきたんだ。でもこれぐらいならやり慣れてるから全然平気だよ」

「ごめんなさい、ライブさん。オリーヴ一人じゃお姉様をお運びできないし、ひきずるなんてもっての他ですし。手伝ってもらおうにも凝人さんを部屋から勝手にお出ししたら駄目だと思ったんです。すみません、オリーヴにもっと力があれば」

「ううん、オリーヴちゃん。判断は正しかったよ。…大体、全ての原因は下着を忘れた私が悪いんだし…」

「でもライブ。私が勝手に無茶したからこんなにライブにもオリーヴにも迷惑かけちゃったんだよ? 一番悪いのは私だって」

そこで会話が突然途切れる。そして三人で顔を見合わせると、私達三人全員笑えてきた。

そしてライブが口を開いた。

「なんか、可笑しいね。みんなで謝り合っちゃったりして。でもなんにせよ、そーちゃんが無事でほっとしたよ」

「そうですね。オリーヴもお姉様が元気でいてくれるとほっとします」

二人のその言葉を聞くと嬉しくて二人になにかしてあげたくなる。そうだ、朝食なら――。

「ふふ、ありがとう二人共。それじゃあライブもいることだし、みんなで朝食にしましょう。」

腕によりをかけてつくっちゃうわよ、何かリクエストはある？」

「あ、私も腕ふるいたいな、そーちゃんとオリーヴちゃんのために」
「オリーヴもお姉様とライブさんのために作りたいです」

「じゃあ、三人で作っちゃおう？」

そのライブの言葉に私とオリーヴも笑顔で頷く。

——その後食べた朝食は、いつもとは一味違って美味しかった——
|。

裏話その2…レモンテイスト・コンチュルトグロッソ

僕はどんな状況下においても動揺しないように訓練してきた。

けど正直、自分の目の前の状況に動揺を隠せないでいる自分がいる。

——原因が昨晚にある事を、この時の僕には知る由もなかった。

「夕風。コーヒー淹れたよ」

「ああ、ありがとうせしら」

夕風はそう言って読んでいた書類を机に置いて椅子から立ち上がり、笑顔で私の出したコーヒーを受け取る。

飲む前に香りを一嗅ぎしてから、夕風はコーヒーをすすった。

深夜午前一時。ここは夕風の家。

——そしてせしら：私の名前は永久村　せしら　（とわむら　せしら）。

怪盗を捕まえるのが主に仕事の探偵局に所属している探偵だ。

歳は：せしらは昔の記憶が曖昧なためかはっきりとした歳は覚えてない。

だけどせしらは今、夕風：埋柄　夕風　（うえ　ゆうなぎ）という男の人の元で暮らしてる。孤児だったせしらは、夕風に拾われて夕風の恩師である永久村の家の養子になった後も夕風の家で暮らす事になったのだ。

：でもそれだけでいい。

昔がどんなであってもせしらは今、夕風と一緒に暮らしてここに居る。

それ以上の境遇なんて考えられないもの。

…訂正、正直それ以上考える事は出来る。

夕風と結婚するとか。

——正直に言えば、せしらは夕風が好き。

ただそれが男女間の恋心か、家族に抱く好意なのかはまだよくわからない。

そもそも恋なんて経験ないし。

「せしら？どうしたの、ぼーっとして」

「りゅにゅ？…ううん、なんでもないの…」

夕風に突然話しかけられ、せしらはどきっとしてしまふ。

「…？あ、もしかしてまた、昔の事無理に思い出そうしてる？」

「りゅにゅ！？」

「それとも自然に思い出したとか？」

せしらはぶんぶんと首を振る。

ちなみにこの『りゅにゅ』という口癖は『流入』という単語から来ている。

密売組織などの事件がらみで覚えようとした単語がいつのまにか口癖になったのだ。

「そっか。何度も言うけどさ、せしら」

そう言うと、夕風はせしらの頭をなでなでしてくれる。

「せしらがどんな過去を持っていようが僕だけは絶対せしらの味方だから。敵ばかりになろうが味方である僕が守る」

——また、いつもの『殺し文句』。

昔の事をせしらが考えていると、それに気付いた夕風が必ずかけてくれる言葉。

「…うん。夕風がそう言うなら信じる」

人の意思は一度聞けばわかるだろう、と思われるかもしれない。でも夕風は気付いた時必ず毎回言ってくれる。

それがせしらにとってどんなに嬉しい事か、どんなに心の支えとなっているのか…夕風はどれくらいわかっているだろ？

「よしよし。…じゃ僕はそろそろ寝るよ。この書類整理も急ぎの用

事じゃないしね」

「せしらは書類以外の整理やる。夕凧、おやすみなさい」

「じゃあお言葉に甘えちゃおうかな。ありがとう、せしら。おやすみ」

夕凧は仕事部屋を後にし、寝室に向かった。

それからせしらは書類以外の整理をする。主に夕凧の鞆や所持品をまとめて、食べ物の残りなどはラップをかけて冷蔵庫へ。

その作業を数分繰り返していたら妙な本を見つけた。

夕凧はたまに休憩時間中、コンビニなどで雑誌などを買ったりする事がある。

だから仕事とは関係ない本が鞆にあってもおかしくはないけど：せしらの知ってる限りでは夕凧が読むのはニュースなどが載っている週刊誌か、パソコンに関する本か、毎週読む漫画雑誌くらいなもの。

でも今見つけた本はそれとは違ってた。

タイトルには『た・べ・ゴ・ロ・？』とある。

帯紙には、

『超絶大人気！ちょっとHな寸止めラブコメディ、満を持して三巻目登場！』

今冬OVA化も決定！』

などと書いてある。OVA？どこの組織名だろ？

本の中身を見てみる。

なんかどのページ開いても大体主人公らしき女の人がHっぽい目に合ってる…。

でも顔に牛乳がこぼれるシーンをやたら大きく書いてあるけどこれって本当にHなの？

よくわからないまま、本を閉じる。そして考え込む。

…夕凧はこういうのを見て喜ぶのかな？

こういうHな事に興味というか、知ってみたくなる事もある。

でも夕風はHな女はあんまり好きじゃないと思っていたので、テレビでそういうシーンをうっかり見てしまった時とかは思わず目を逸らしてきた。

せしらは記憶が曖昧なせいもあって、昔に学んだであろう歳相応の性知識も少ししか覚えていない。日々の生活に困らない程度ぐらいしか。

だから同世代の人よりこういう事に疎いのも自覚してる。

それは今まで夕風に嫌われまいと必死にHな事を知るのを拒否していたからだけ。

でも。まさか夕風が…夕風が…

こ…こういう事に興味があつたなんて…じゃあ、せしらは…今まで…何を…

せしらはある事を決意した。

ここは探偵局池袋支部。午後二時十五分。

呼び出しがかかった四人の探偵局S級ライセンス取得探偵が会議を終え、会議室から出てきた時だ。

「そよぎ、ライブ」

「あら、永久村さん」

「あ、せしらちゃんだ。今日は埋柄さんは一緒じゃないの？」

そう言ってせしらに話しかけられたS級ライセンス取得探偵の四人の内の二人はいつも同伴している夕風がいない事に気付いた。

日本にたった八人しかいない内の二人のS級ライセンス探偵、そよぎとライブ。

ほぼ同時期にS級ライセンスを取ったから仲が良いのか、そよぎとライブは探偵の仕事以外では一緒にいる事が多い。

そよぎは元々夕風の教え子だったためせしらとも知り合いだった。

せしらとライブはそよぎを通して知り合ったが結構気が合うのでせしらがライブに料理を教えてもらったりしている。

その二人が今日ここに来るといいう情報があったので、せしらは二人と話すために来た。

「りゅにゅ、今はせしらだけ。夕風は今、事務処理中」

「せしらちゃんは終わったの？事務仕事」

「りゅにゅ」

せしらはこくと頷く。

「…相変わらず、埋柄さんはそういうの苦手なのね」

「りゅにゅう…うんと、今日はせしら、二人に聞きたい事があって来た」

「何かしら？」

「私達に？」

そよぎとライブは一度互いの顔を見合わせ、せしらに視線を向け直す。

「…『キス』って本当にレモン味なの？」

「えっと……………」

「……………」

せしらのその言葉にライブは少し悩んだ様子で、何を言うべきか迷っている。

そよぎは顔を紅潮させながら呆然としていた。

「えっとね…多分だけど“恋愛は甘酸っぱい”っていう言葉をよく聞くじゃない？」

ライブは語り出す。その横で、そよぎはまだ惚けていた。

「甘いだけじゃなくて恋愛には酸っぱいような経験もあるって意味なんだろうけど…」

ライブが話す横でそよぎは煙が耳から出てきそうなくらい頭を抱えて悩む。

「だから、レモンの味とそれをかけて、キスとかが甘酸っぱいレモンの味がするなんて言われるようになったんじゃないかな？」

「…なるほど…」

せしらはうんうんと頷く。

そよぎはそのせしらの様子に気付き、この手の話は終わったのだろうと思ったのかハツと我に返る。

そこへ、それぞれの好みのジュース缶を片手に、話しながら近づいてくる四人組が来た。

長髪で、ジーパンに少し厚めの上着を着た、シンプルな格好をしている男性が持っているのは炭酸飲料。

長い髪を横で縛り、スラッとした体型を肩出しタートルネックとミニスカート、オーバーニーソックスのファッションで前面に押し出している女性はスポーツ飲料を持っている。

同じく長い髪を横で縛ったもう一人の女性はスポーツ飲料を飲んでいる女性とは雰囲気が違い、とても物腰が柔らかに見える。その女性は少しフリルのついた服にロングスカートといった可愛らしい格好で手にはオレンジジュースがあった。

残る一人の少女は、せしらの元々の知り合いのオリヴィアニア、通称オリーヴ。他の三人に比べ年は恐らく下。髪型は金髪のカット、少し髪を左右に縛り上げている。オリーヴは他の三人の話を物珍しそうに聞き入っていた。

その四人はライブとそよぎを見つけると歩み寄ってくる。

最初に話しかけてきたのはスポーツ飲料をもった女性。

「あれ、君ライブさんとそよぎさんの知り合いにゃ？アタシは庭苗 アルマ。よろしくー」

「りゅにゅ。せしらは、永久村 せしら」

「『りゅにゅ』？おお、可愛いなー、せしらたん。よし、なでこなでこ」

そう言ってアルマはせしらの頭をやんわりと撫でる。

そうしていると、オレンジジュースを持っている女性が、むすっ

とした様子でせしらとアルマを見つめ、右手の指にはめているメリケンサックを左手の人指し指で『いじいじ』といった感じでいじっている。

それに気付いたアルマは、せしらの頭を撫でるのを止め、むすつとした人に向き直ってその人の頭を撫で始めた。

「ほら、アルムも。なでこなでこ」

アルムと呼ばれた女性は、アルマになでなでされて恍惚としている。

――ふと、思いつく。

せしらはキスがレモンの味とかがつてというのが比喻表現なのはなんとなくわかったけど経験した人がいるのならその人の感想を聞いてみたくなった。

そう思ったせしらはまずアルマに聞く事にした。

「アルマはキスした事あるの？」

その言葉を聞いたアルマはせしらを見る。そして一言。

「ないよー」

あっさり一言。だけどその言葉にアルムは鋭く反応して、いきなり『くわっ』としたような険しい表情になる。

「いーえ、お姉様はわたくしと毎日キスしてるじゃありませんの！？」

その台詞でせしらはいきなり突風が目の前から吹いてきたような衝撃を受けた。

(…女の人同士で?! それっていいの!?)

詳しい話を聞こうとせしらはアルマに視線を集中させる。

だが当のアルマは必死に思い出そうとしているが、結局心当たりはない様子だ。

そこへオリーヴが話しかける。

「あの…アルマさん、キスはキスでも『間接キス』ならオリーヴに

も心当たりがあるんですが」

「……ああ、なるほどー。さっすがオリーヴたん!! あったまいー」

そう言って今度はオリーヴの頭を撫で始めたアルマ。

アルムはがっくりと肩を落しうなだれ、参ったというような感じだ。

後から聞いた事だけどアルムはアルマの使ったコップなどを事あるごとに使い、間接キスをしていたようなのだ。

アルマとアルムの事はわかった。次は…

「…オリーヴは？ キスとか」

「え？」

アルマに頭を撫でられているオリーヴは一瞬驚いたけど、平静な様子で口を開いた。

「オリーヴはまだ子供ですし、そういう事はちよつと…すみません、お役に立てなくて」

——オリーヴは極めて冷静だ。

なんとなく思っていたけど、もしかしたらこのメンバーの中で一番落ち着いているのはこの子なのかも。

「…じゃあ、あなたは？」

せしらは話に参加するのが気まずいと感じたためか一步引いて話を聞いていた炭酸飲料を持っている男の人に話しかける。

「俺!?! いや…俺は…まあ小さい頃にふざけて妹としたぐらいしか…」

——この台詞に聞いていた人全員が凍りつく。

(女の人同士の次は兄妹同士!?)

せしらは台風のような衝撃を受けた。

「あ…いや、子供の時だよ?! 悪ふざけ! もちろん本気なわけなし、感触なんて覚えてもないって!」

男の人は慌てて自分の発言による誤解を解こうとするが…なんとなく周りの疑惑の視線が向けられるような雰囲気になった。

男の人はだらだらと冷や汗を滝のように流している。

あと聞いてない人は…。

「ライブとそよぎは？」

せしらがそう聞いた瞬間。

そよぎとライブはほぼ同時に反応した。

「…私！？あるわけないわっ、そんな事！大体私には…」

「私もないな。そういう事って本気で好きな人とじゃないと嫌だから…って、そーちゃん？」

二人がほぼ同時に返事をしたため、ライブはそよぎの話をよく聞き取れていなかったようだ。

ライブはそよぎの発言に何か違和感を覚えたみたい。

「『私には』…ってまさか、そーちゃん…」

ライブは心底驚いた様子だ。

訂正。どうやら聞き取れなかったんじゃない、全てちゃんと聞いていたみたいだ。（すごい聴力だ…。）

「え、な、何、ライブ！？あれ、今、私…」

そよぎも自分の発言に混乱している。

「えっと…そーちゃん今、特定の好きな人がいるように聞こえて…その」

ライブは顔を赤らめながらしどろもどろで言う。

「え！？え、あ、……………その……………そういうんじゃないって……………あ…違う、…じゃなくて……………え…えっと…」

そよぎも顔を赤らめ、かなり慌てている。

「…そーちゃん…？」

「えっと…そう！私は皆の事好きよ、ライブもオリヴも、皆！…好きだよ、ライブ？」

そこまで言うところよぎは顔を下に向け、黙ってしまった。

「…………あ、あ、あはは…そうだね、私も皆好きだよ。…………そーちゃんて美人さんだから私、なんかはやまっちゃった…かな」

そこまで言った所で、今度はライブが黙ってしまった。

…端から聞くと全く意味が分からないけど…

何故か、ライブとそよぎの二人の間では会話が成立したようだ。

これも後から(略)

「あ…ところでせしらちゃん」

顔を赤らめながら、ライブはせしらに今の空気に耐えられなくなったかのように話しかけてきた。

「なんで急にキスの事とか気になったのか、聞いてもいいかな？」

「…せしら、昨日夕風の荷物整理してた」

「埋柄さんの？」

「りゅにゅ。それで、見つけたの。『た・べ・ゴ・ロ・?』って本。それに書いてあった。キスはレモンの味だって」

「あ…それ…」

「凝人さん？知ってるんですか？」

それに反応したのは炭酸飲料を持った男の人。

どうやらコルトという名前らしい。

凝人は言葉を続ける。

「いや、今友達の間で話題にちらほら出て来るんだよ。アニメになるだのなんのって」

「…凝人様はそういうのが好きなんですのね」

「アルムちゃん!？」

オレンジジュースを持った女の人はアルムという名前のようにだ。

アルムは凝人に納得した様子で話しかける。

「いや、それは友達が…」

「ま、男の人はそのぐらい当然だという事にゃ」

「アルマちゃんまで!？」

今度はアルマからの言葉の一撃。

「…男の人には立派な所が沢山あると思います!」

…オリヴに悪気はないのはなんとなく分かる。
けどそれが凝人にとってとどめであったようだ。

「俺、忘れ物があるの思い出した！取ってくる！」

凝人は逃げ出した。

かすかに涙目だった気がするのは気のせい？

…走り去っていく凝人の背中が哀愁に満ちているのも気のせい？
それからしばらくして、ライブが話し出した。

「…アルムちゃん、ちょっと凝人さんをいじめ過ぎじゃない？」

「そうですね？まあ性急なのが男の人では当然のように思いますの。
だから凝人様自身が恥ずかしがってはいけないと思いますの」

「え？なんでコルトさんは逃げたのかにゃ？」

「…私、あとで凝人さんにお菓子とか作って差し入れたいと思います
す！」

アルマとオリヴは言った。

…この会話から読み取ると…無自覚に凝人をいじったのがほとんど
(三分の二)らしい。

それはそれで余計悲しいような気がする。

家に帰って、昨日出てきた『た・べ・ゴ・ロ・？』の本をもう一
度、ぱらぱらとめくってみる。

(…夕風…)

「せしら、何やってるの？」

「りゅにゅう！？」

突然、後ろから話しかけられた。

驚いて後ろを向くと、きよとした様子の夕風がいた。

せしらが家に帰ってきた後、すぐに事務処理の後の新人研修から

帰ってきたらしい。

「…この本、せしらが買ったんじゃない」

とっさにせしらが言った言葉。せしら自身にもよくわからない発言だ。

なんで今の台詞を言ってしまったんだろうか？

そんなのわかりきっている事なのに。

「は？…ああ、いや、わかってる」

夕風はやれやれと言った感じだ。

思わず、せしらは勢い余って自分のスカートの両端を掴んだ。
そして思いっきり上にめくる。

僕はどんな状況下においても動揺しないように訓練してきた。

けど正直、自分の目の前の状況に動揺を隠せないでいる自分がいる。

今日の前にある光景。

せしらが顔を真っ赤にしながら目をきつくつむって、震えながら自分で自分のスカートをめくり、中の下着を僕に見せ付けている。
白い生地中央にクマのイラストが描いてあるまんがパンツが、晒されている。

僕は埋柄 夕風。

探偵局A級ライセンス取得探偵で…って、今はそんな事は置いとく！

「…せ…せしら…」

「…夕風…」

「ストトオオオオツツツツツプ！！！！！！」

僕は思わず叫んでいた。

近隣住民が迷惑するぐらいの大声で。

「りゅにゅ…」

せしらはそれに驚き、へなへなとその場に座り込んだ。

「りゅにゅう：夕風、なんでストップなの：？」

「そ、そりゃそうでしょ！？ いやさ：そうだ、せしら！その本貸して！」

そう言うとは僕はせしらが掴んでいた本を手を取ってみる。

（：つまり、この本に影響を受けたって事か）

僕はため息を一つついた。

でも、なんとなくわかってきた。

自覚はしていたんだ。僕がせしらを子供扱いしてしまっていた事。だからその反発で、思わずせしらはこういう事に憧れてしまったのだろう。

とすると、やはり原因は僕だ。

（これからはそういう所にも気を使ってあげなきゃな：）

「夕風？」

「あー、せしら。とにかくごめん。君を子供扱いするつもりなんてさらさらなかったんだ」

「りゅにゅう？」

「僕は君を守りたいって思ってる。それは今も変わらないけど、どうやら君に対して過保護になっていたようだ。だからごめん。その：せしらがそういう事に興味があるのは一向に構わないんだけど、いきなりは良くない。だからそういう事も僕がこれからゆっくりと教えてだね：」

「：りゅにゅう？夕風、こういうの好きじゃないの？」

「え？僕は：」

「だって夕風の荷物の中にあっただからせしらはてっきり夕風はこういうの好きだと思って」

「あ。あー、そういう事か」

僕はようやく理解した。

どうやらその本が僕の趣味の本に思えて、それで優しいせしらは家族のような愛情のつもりで僕にあんな事をしたってことか。

「それ実を言うと僕のじゃなくて、新人が仕事場に持ち込んできたから没収したもののなんだよね。取り上げてから一週間後、つまり今から六日後に返す予定だったんだ」

その僕の言葉を聞くと、せしらは呆然としていたが：

突然、近くにあったクッションを頭に被せ、その場にまるまった。せしらが恥ずかしくなるとよくする動作だ。

「：なんかせしらに誤解与えちゃったみたい：だね。ごめんよ、今日はせしらの好きなハンバーグ作るからさ、機嫌直してよ」

僕はせしらの頭をクッションの上から撫でる。

しばらくそうしていると、せしらが顔を上げた。

「：ほんと？ハンバーグ：」

「ほんとさ。だから、ちょっと待ってて。今作るから」

せしらはこくと無言で頷いた。

——僕はある事情からせしらを預かった。そしてそれから、せしらを守っていこうと誓った。

せしらの事情を知っているからなのか、それともせしらに男女間の恋心を抱いているからなのか、家族に抱く好意をせしらに向けているからなのか、理由ははっきりわからない。

この年になっていまだに恋の経験がないからかもしれない。

でもいつかは必ず答えを出す。

でも今は。

今だけはただ、せしらと一緒に居られる事が嬉しいから。

僕はそう思いながら、さっそく夕飯の準備にとりかかった。

裏話その3：私のヒーロー、アタシの旋律

郊外にある古い屋敷。

周囲からはひととき目立つくらい大きな屋敷で、門などの近くには監視カメラが設置される程厳重な警備体制が敷かれている。

表札には『庭苗』と書かれている。

「ここがアタシとアルムの家。今はパパもママも居ないから、勝手に入って大丈夫にゃ。さて、鍵は…」

そう言ってポケットから鍵を探す、スラリとした体型に長いポニーテールを横に流した髪型の少女。

彼女の名は庭苗 在希（にわなえ あるま）。

“希望”が“在^ある”という由来で付けられた名だ。

現在、怪盗としての修行のため、そよぎ邸に住まわせてもらっている。

「うーん、ない…。置いてきちゃったかな、そよぎさん家に。もう、こうなったら門を壊して…」

アルマはそう言うのと、門に向かって格闘術の型を構える。

「お、お姉様！鍵ならわたくしがありますわ！今、開けますから壊すのはやめてくださいまし…」

そう言って鍵を出したお嬢様言葉の少女の名は、庭苗 在夢（にわなえ あるむ）。

名前は“希望”が“在^ある”であるアルマに対し、“夢”が“在^ある”という由来で付けられた。

アルマの義妹で、活発そうな姉とは正反対のおとなしめな感じの少女である。

ただ、おとなしめなのはあくまで見た目だけで実際は激しい感情をストリートに出す積極的な性格をしている。

特に姉のアルマに対しては愛情に近い感情さえ抱いており、結婚したいと思っている程でそれを周囲に隠そうともしない。

さらにライブに対してはマゾヒストのような態度で接する事もあり、周囲には理解され難い面がある。

アルマとアルムは血筋が違えども、共に怪盗の血筋を引いており今では怪盗修行の一環としてライブとそよぎの怪盗仕事を手伝うメンバーの一人として活躍している。

庭苗邸へと足を踏み入れるライブ、そよぎ、オリーヴ、凝人、そして庭苗姉妹。

アルマとアルムはライブ達とは違う学校に通っているがそよぎ邸から直接学校に通うようになった為、実家には帰らないでいた。

だがもちろん学校に行くに限っての事ではないが、日常生活に私物は少なからず必要になる。

だから自宅から必要な私物を調達させる為に今日ここに来たと
いうわけだ。

調達するのは私服や使い慣れた枕などその他諸々。

一同は広い屋敷の中の部屋を回り、庭苗姉妹の私物を整理するのを手伝う。

そして作業が一段落した頃――。

家のリビングでみんなとお茶の時間を楽しもうと、アルムは台所から紅茶の葉やお菓子、ティーセットを用意する。

すると、どこからかピアノの音色が聞こえてきた。

それを聞き急に懐かしい気分になったアルムは、用意していたティーセットを一旦置き、ピアノの音がする部屋へと向かった。

楽器などがいくつか並ぶ中、窓際にピアノがある部屋。

そこでピアノを弾いていたのは――アルマだった。

目をつぶり、ピアノで美しい音色を奏でているアルマ。

アルマがその部屋に入ると、気配に気付いたアルマが演奏を止める。

「アルム、どうしたの？ そろそろお茶の準備するって、台所に行っ
たんじゃ」

「つい、懐かしくなっちゃいました。…そのピアノ」

「そっか」

短い会話を交わすと、アルマとアルムの二人はピアノの端の方にある少し目立つ傷を見る。

「…アタシは馬鹿だけど…こればかりは忘れないだろうなあ」

「…お姉様…」

アルマはまたピアノを弾き始める。

休まるような、安らかな音色を立てるピアノ。

アルムは演奏に聞き入っていたが、数分後に二人のいる部屋に他に入ってくる者の気配がすると、気配の方へと視線を向けた。

部屋に入ってきたのはライブとそよぎ。

アルマが演奏を一通り終わると、ライブとそよぎは拍手をした。

「アルマさん、ピアノ弾けるんだ…上手だね」

「ええ、上手だったわ、アルマさん。その曲、『t w i l i g h t』
ね？」

「流石そよぎさん、知ってるんだ。じゃ、これは知ってる？」

アルマはさっきとは違う曲を弾き始めた。

さっきの曲とは違うが、これも休まるような音色をしている。

「ええ。…『新たな季節』ね」

「おお、正解！ よく知ってるにゃー」

「うふふ、だって。『t w i l i g h t』も『新たな季節』も、駅の
ホームで使われている曲じゃない」

「あ、そうなのかにゃ。あの子……。そういうしばらくで曲を覚えてたのかも……」

「……あの子？」

ライブの問いかけにアルマとアルムははっとした。

ちなみに庭苗姉妹が通っている学校は送迎バス制で、アルマもアルムも電車経験はほぼ皆無なため、駅のホームの曲だと知ってはいなかったのだ。

「……お姉様」

「あ……うーん……別に隠す程の話でもないんじゃない？」

「まあそうですね……」

「あ、その……話したくないなら話さなくていいよ？ごめんね、私、つい……」

あわてて話すライブを見たアルマとアルムは顔を一瞬見合わせ、頷き合う。

「……出会ったのはまだ、アタシが何にも将来の事なんて考えてない頃だったなー」

「わたくしもまだ、お姉様を義姉じゃなくて実姉だと思い込んでいた時期でしたわ。十年近く前でしたっけ」

アルマとアルムは語り始めた。

昔からアタシ——アルマは体を動かすのが好きだった。

喧嘩なら男子が束になってかかってきても勝てるくらいの自信があった。

いじめようとしてきた男子を逆に泣かせた事もある。

でも決して周囲に対して威張らなかった。

というより、人付き合いが苦手なアルムとよく一緒にいた事でアルム以外に話友達などろくにいなかったから威張りようもなかっただけだが。

でも結果的に『喧嘩は強いのに威張らない人』として認識され、周りに敵意を向けられる事はなかった。

その認識が自他問わず定着し始めた頃だったろうか——ある出会いが起きたのは。

アタシのママは元プロの画家で、画家を引退した後は自宅で絵画教室の先生をやっていた。

そこにある画家を志す人がやって来た。

その人は海外にいる両親に代わって幼い妹の世話をしている人で、名前は越静 梨尾（こしず りお）、その妹の名は越静 麗尾（こしず まお）という。

姉の梨尾が絵画教室に通っている時、麗尾は庭苗家の客室で姉の帰りを待っているのが日課だった。

ある日、アルムとボール遊びをしていたアタシは誤って客室の窓近くにボールを放つてしまう。

ボールを取りに行ったアタシはそこで初めて麗尾の存在を知った。窓の外から見る麗尾は、客室にいつのまにか運び込まれたピアノを弾いている。

麗尾の為に越静家から持ってきた物だと後で聞いたピアノだ。それはとても綺麗で安らかな音色を立てていて。

アタシは子供ながらに感動というか、とにかく凄いと思った。

それゆえ、アタシは演奏の後思わず拍手をしてしまう。

拍手に気付いた麗尾は、アタシに気付く。

——これが、アタシと 麗尾の初めての出会いだった。

「アルマちゃん、アルムちゃん。遊びに来たよー！」

髪は後ろで短く束ねられ、運動は苦手そうな行動の遅さだがとても元気な様子で、庭苗家を訪れる度に挨拶する麗尾。

麗尾と友達になってからは私とアルム、麗尾の三人で遊ぶように

なった。

幸せな時間だった。

：けど麗尾の姉である梨尾に麗尾の置かれた状況を聞いた時から、少しづつ幸せにほころびが生じてきた。

「：あの子、麗尾は先天性の病があつてね。余命ももって七年って医者には言われてるの。

：だから遊んだりしてて迷惑をかけるかもしれない。でもアルマちゃん達と出会って私ですら見た事ない笑顔で笑うようになったのよ。だからこれからも仲良くしてあげてね」

先天性の病？

余命七年？

アタシの前では麗尾はそんな様子、一切見せなかった。

そんな動揺もあり、話をされた時は正直どう返事したらいいかわからない。

けど、その場のアタシはただ頷いた。

梨尾の言葉が頭の中から離れないでいるアタシは、ただ夢中で麗尾と遊んだ。今まで以上に。

町に連れ出したり、家の中で色々な事をしたり。

：必死だったんじゃないかと思う。

この世に生きる事があと何年かで叶わなくなる友達に、少しでもいい思い出を残す事に。

でも結果的に必死になった分、麗尾がアタシの目の前で倒れた時のショックが大きくなってしまったのだ。

町に二人でいる時だった。アタシが麗尾をおぶって病院まで運び、なんとか一命は取り留めた麗尾。

そしてその夜。麗尾は全てをアタシに打ち明けてくれた。

「今まで黙っててごめんね、アルマちゃん。：私、普通の人と同じ

くらい長く生きられないの。お医者さんにもどうしようもないんだって」

「…うん」

アタシは病院のベッドで痛々しいくらい機械とかコードをつけられている麗尾を前に、梨尾の話の時と同じ、ただ頷く事しか出来なかった。

麗尾の将来の夢はピアニストになること。

麗尾の憧れのピアニストのこと。

麗尾が、初めて友達になってくれたアタシとアルムにとっても感謝していること。

麗尾が倒れた時、おぶって病院まで運んだアタシがまるでテレビのヒーローみたいに格好良かったこと。

話を聞き終え、病室を出たアタシはしばらく黙り込んでしまっていた。

麗尾の状況を病室で話されてから数日。

麗尾はなんとか持ち直したようで、少し気分が良くなった日に庭苗家にピアノを弾きに来た。

麗尾はいつも通りの安まるような良い音色をピアノで奏でていた。だが、小休止していた麗尾が言った一言でその安らかな音色に残酷さを感じるようになる。

「私…このピアノを弾きながら死ぬの」

麗尾にとっては本気で思っている、軽口と思って欲しかったのだろう。

珍しく麗尾が吐いた弱音だった。

だがアタシにとってはピアノを弾き続ける限り、麗尾は死ぬ事ばかり考えてしまう——そう思えたのだ。

だから麗尾が病院に戻ろうと部屋から出た直後、アタシはピアノを壊す事を考えた。

ピアノを修理する間は少なくとも麗尾は生きようとする——そう思ったからだ。

アタシは手近にあった椅子を持ち、ピアノに向かって振り上げる。そして振り上げた直後——。

ガチャリ、と部屋のドアが開いた。

アタシはとっさにそれに反応したが、振り上げた椅子は止まらず、ピアノをかすめて、ピアノの端に方に少し目立つ傷を残すくらいで床に落ちた。

でもまだ壊したりないと思ったアタシは椅子を再び振り上げようとする。

「…何…してるの…」

だが、それはかすれた声に阻まれる。

忘れ物に気付いた麗尾がアタシのいるピアノの部屋に戻って来たのだ。

「……………」

アタシは凍りつく。

「…アルマちゃ…っ！…！！」

麗尾は肩を震わせ、アタシをにらむ。
今まで見た事のない表情だ。

「ひどい…ピアノを…壊そうと…」

「だって…だって麗尾が」

「…アルマちゃんなんて知らないっ！！！」

麗尾はそう言い残し、部屋から出て行ってしまった。

アタシはそれを追いかける。

体力がない麗尾にはすぐに追いつき、アタシは麗尾の腕を掴む。

だが麗尾はアタシを払いのけて、咳きこみながらアタシから逃げようとする。

それが分かったというのまにかアタシは麗尾を追いかける事を止めてしまっていた。

——というより出来なくなってしまったのだ。麗尾に信頼を壊すという取り消しのつかない事をしてしまった罪悪感で。

その後は麗尾と顔を合わせられなくなってしまった。

ほぼ毎日聞こえていたピアノの音も聞こえなくなってしまった。

それどころか、庭苗家に梨尾が来る事があっても麗尾が来る事はなくなってしまったのだ。

麗尾はもう退院して、日常生活に戻っているはずなのに。

始めのうちは『麗尾なんて…』と麗尾に対して怒っていた。

だが時間が経つ度、麗尾に謝りたい気持ち膨れ上がってくる。

そう思ったアタシは、父から裏社会についての話を聞かされていた事を思い出し、ある考えを思いついた。

その考えとは、表社会の人達が医療を受けるのとは別に、秘密裏に裏社会に人達を相手に医療行為をする裏医者に麗尾の病気を診てもらおうというもの。

もし麗尾の病状が良くなれば謝る機会も増えるというわけだ。

裏社会の医者は表社会の医者よりも遥かに優れている。

警察沙汰になるような大怪我でも金次第で証拠隠滅して治療してくれるという、裏社会になくてはならない存在である。

ただアタシは今まで裏社会に手を染めた事はなかったから正直怖くて嫌だったが、麗尾の為にやる事を決意した。

病院の裏口から入ると、『立ち入り禁止』の札がある。

アタシはそれを無視して入り、奥のドアをノックする。

「――誰だ？立ち入り禁止の文字がわからんのか？」

ドアの向こうから聞こえてきたのはぶっきらぼうな若い男性の声。

「――『わかりません。だって私は強盗で、バズーカ一丁を持ってきたるんですから』」

アタシはパパから聞いた事のある暗号を駄目元で言ってみる。

暗号の意味は裏医者に対して、『貴方に任せたい仕事が一件ある』という意味らしいが……

「……入れ。人目についてこよう」

ドアを開けて、アタシを見下ろす裏医者と思わしき若い男性。

とりあえず話は聞いてもらう事は出来そうだ。

「ほれ、飲めよ。俺は医者だ、毒なぞ混ぜんよ」

裏医者は、アタシに作りたてのホットミルクを渡してくれた。

そして椅子に腰掛け、タバコを咥える裏医者。

「……で、だ。どうやって今の暗号を知った？」

裏医者がタバコにライターで火をつけながらアタシに問いかける。

「パパから。意味はよく知らない」

アタシはズブーッとホットミルクを飲みながら答えた。

ため息まじりに手元にある何かの名簿をパラパラとめくる裏医者。

「……全く。これだから裏で妻子持ちはまずいって言っても聞かない奴は……」

裏医者はタバコを灰皿に置いて、アタシに向き直る。

「まあ娘に盗み聞きか何かかかされている時点でその父親に非がある。請求はそっちでいいか。…お譲ちゃん、用件は？」

「病気を治して欲しいの。…この病院で治療を受けてる越静 麗尾って子の」

「…この病院に俺のような裏医者が居てよかったなって言っておこう。越静 麗尾、と…」

さっきの名簿とは別の名簿を取り出した裏医者は、麗尾の事を探しているようだ。

「…ふうむ…こりゃ厄介だな。完治はすぐには無理かもしれんが、良くなる可能性がないわけじゃないな…ほら、この薬だ」

「本当なの!？」

アタシは裏医者から薬の名前が書いてある紙をひったくる。

「ただ厄介なのはその薬、日本じゃ臨床実験もされていない…つまり日本では使用不可の薬なんだよ。俺みたいな裏医者ならそれぐらい用意してやりたい所だが…あいにく、その薬は日本国内じゃ品切れ状態。手に入るのもかなり先の話になっちまう」

「そんな…」

「だが確か、この町の研究所に在庫がまだ残っているかもしれん。そこに行けばあるいは…ん？」

アタシは裏医者が話し終える前に、研究所から薬を盗み出す為にその場から去っていた。ホットミルクを全て飲み干して。

「…まったく、俺は知らんぞ」

裏医者はそう言って、アタシの残していったホットミルクが入っていたコップを流し台に置いて、またタバコを吸い始めた。

(ま、無事に手に入られても俺の所にまた来ないとあのお譲ちゃんには薬をどう使うのかもわからんだろうが…)

裏医者は心の中で呟いた。

研究所の窓の中を覗く。

通信ルームと思われる場所に窓ガラスの一部を割って内側の鍵を開け、窓を開けて浸入する。

そして通信機器のコードを切り、通信ルームから研究所のさらに奥へと侵入する事にした。
物陰に隠れながら進むアタシ。

だが、突然ゆっくりと近づいてくる足音がした。
その足音の主は警備員。暗闇でよく見えないが、警備服っぽい物を着ているから分かる。

アタシは意を決してその警備員にタックルする。
タックルされた警備員は倒れた。

「何だ、子供だと!？」

その叫びに気付いたのか、二人目の警備員が来た。
捕まえようとする警備員達をアタシはかわす。
そしてアタシは拳を後頭部にヒットさせようと構える。

――だが突然、後ろから鈍い痛みがアタシを襲う。
やって来た三人目の警備員がアタシの後頭部を警棒で殴りつけたのだ。

アタシが痛がっていると、警備の一人がアタシの腹に蹴りを入れる。

「子供が…やりやがったな」

「かはっ…」

アタシはえずく。今度は頭を踏みつけられた。

「…くっ…ええいっ!」

とっさにアタシの頭を踏みつけている足を掴み、警備員を転倒させる。

「ちっ…」

警備員は舌打ちと共に、掴まれている足でアタシを蹴った。
その衝撃でアタシは吹っ飛ばされ、倒れこむ。

「……っ…助け…る…んだ…」

アタシはよろめきながら立ち上がる。

しかし、警備員の一人が立ったアタシの横っ面を殴った。

アタシはバランスを崩してまた倒れこむ。

…だけどまだ意識はある。

ここで諦めるわけにはいかない。

その一心で這いずりながら警備員の足を掴む。

アタシの腕が警備員の蹴りを何度もくらう。

けどアタシは掴んだ手を決して離そうとはしなかった。

その後、しばらくして蹴りが一瞬止んだかと思うと顔を思い切り正面から殴られた。

アタシは口の端を切ったのか、口中に鉄のさびたような味が広がる。

「通信機、壊されてます。多分、コイツの仕業じゃないかと…」

警備員達の話声が聞こえる。

だがアタシの意識ははっきりとせず、途切れかけていた。

（もう駄目だ。アタシ、死んじゃう…）

「——子供相手にやり過ぎだとは思わんかね？」

聞きなれた声がした。だがいつもの聞きなれた声の中に、静かな怒りがある事ははっきりとわかる。

「パ…パ…？」

アタシはかろうじて顔を上げる。

警備員達に向かっているのは…アタシのパパ、庭苗 暦治（にわなえ れきじ）だったのだ。

警備員達が構える前にパパは右手で警備員の一人の顔を掴み、壁にめり込ませる。

——まるで壁が柔らかくなったようなめり込みぶりだ。

壁にめり込んだ警備員は一発で意識を失った。

そしてパパは次々に警備員を壁にめり込ませていく。

——ほんの数秒だった。

ほんの数秒でその場にいた警備員は全て意識を失った。

そしてパパはアタシを抱き上げ、口の端から出る血をハンカチで拭ってくれる。

「…パ…パ」

「しゃべらんでいい。話は全て聞いた、お前の訪ねた裏医者からな」
後から聞いた話だが、アタシの訪ねた裏医者が子持ちの裏社会人にアタシの情報を流し、パパがアタシの行動に気付いたという事だ。そしてこれも後から聞いた話だが、パパは裏社会で『変容の魔術師』と呼ばれ恐れられている戦闘屋をやっている程の実力者だったのだ。

パパに助け出されたアタシは訪ねた裏医者の病室で治療を受けた。

『運が良かったな、どこの骨にもひびは入っちゃいないし、内臓にも大した損傷はない。まあ身体に残った痣はしばらく消えんだろうが』とのことだ。

それだけ話し終えると裏医者はベッドの周りのカーテンを閉め、カーテンの外に行ってしまった。

何分か経って聞こえてきたのはパパと裏医者の話す声。

「今回の事は俺にも落ち度がある。半値にしとくよ」

「いや、全額支払おう。色々と手間をかけた。…それと、これを」

「…へえ。流石だな…裏で名高いだけはあるな。これでお宅のお嬢さんの努力は無駄じゃなかったってわけだ」

（…何…話してるんだろ…）

アタシはそう思ったが、その直後に体力の限界で寝入ってしまった

ていた。

「……………」

アタシはまぶたをゆっくり開ける。

日差しがまだまぶしく、目をこすりながら身体を起こす。

どうやらアタシは裏医者の病室から普通の病室に移動させられたようで、寝付いた時とは違う病室で目を覚ました。

「…起きたか」

アタシはビクツとして、声の主の方へ顔を向ける。

するとアタシの予想通り、声の主は怒り心頭、といった様子のパパだった。

「この…馬鹿者がっ！！！！」

一喝。

（ああ…やっぱり怒られる…）

アタシは内心でひどく落ち込む。

「無謀な事を自分だけで判断し、勝手に行動する。それが必ず良い結果になるなど…現実はお前が思う程、簡単ではない！！！！…だが」

ぴたっ、とパパの怒り声が止まる。

「だが実際、お前の無謀な行動が意味を持った。今回ばかりはな。

…入ってきてくれ」

ガラリとドアが開く。

そこから入ってきた人物を見て、正直アタシは固まった。

「…アルマちゃん」

うつむき加減に入ってきたのは麗尾だった。

なにか紙の束のようなものを持ってもしもじとしている。だが意

を決したように口を開いた。

「：アルマちゃんがピアノを壊そうとしたのは私が後ろ向きな事言
ったからだって、お姉ちゃんや周りの人に言われて気付いて：ずつ
と謝りたかったの！だから：ごめんなさい。あの：これ。お礼」

麗尾はアタシに持っていた紙の束を渡す。

中を見るとそれは楽譜だった。しかし普通の楽譜に丁寧細かい
解説が至る所に記されている。

これを見ながらなら鍵盤すら覚えられない馬鹿なアタシでもピ
アノが弾けそうなくらい、丁寧に書かれている。

アタシが麗尾に出来た事なんて何もないからお礼なんてもらう資
格はない。そう思ったアタシはパパに視線を向ける。

「：お前が危険な所まで行って薬をとって行こうとした。そのお前
の行動がなかったら私が薬を取りにくい事もなかったろう。だから
薬を麗尾嬢に持ってきたのはアルマ、お前だ」

「うん、アルマちゃんのパパから話は聞いたの。アルマちゃん、ひ
どい事言ったアタシなんかの為に一生懸命頑張ってくれたって。：
本当にありがとう」

結局、パパは麗尾の為にアタシが盗みきれなかった薬を代わりに
盗み出して来てくれたのだ。

「：麗尾：ごめんなさい：アタシ：」

「ううん、いいの。あ、それとねその楽譜：アルマちゃん、楽譜が
難しくて読めないけどピアノを弾いてみたいって言ってたから：私
が楽譜が読めなくてもピアノを弾けるように書いたの。私の覚えて
る曲の全部の楽譜。本当はもっと良い物をプレゼントしたかったん
だけど、お金とか持っていないし私の出来る事ってこれぐらいだから
：」

「麗尾っ：！」

アタシは楽譜を大事に抱えながら、ベッドから立ち上がり麗尾に
抱きついた。

「ありがと：麗尾：」

「うん…。…やっぱりアルマちゃんは私のヒーローだよ…」
アタシと麗尾はしばらく抱き合っていた。

数日後。

薬を投与された麗尾は病状が軽くなり、その薬を使った本格的な治療をする為に両親のいる外国に行く事になった。

実を言うと投与された薬が効くかどうかなんて裏医者ですら確証はなかった。

だが今回の麗尾の件で効果がある事が分かった為、その薬を使用可能な国で完治を目指して外国へ行く事になった、というわけだ。

梨尾は絵画の勉強の為に日本に残る事になり、アタシとアルムと共に麗尾を空港へ見送りに行ったりした。

アタシはピアノを麗尾から譲り受け、練習して弾けるようになったら麗尾に聞かせる事を約束した。

ピアノを譲られた理由は、外国に行ったら麗尾は治療に専念する為、ピアノもろくに弾けなくなる事もあったのだろう。

——それから何日か経って。

飛行機事故で麗尾が帰らぬ人となった事をニュースで知った。

アタシは泣かなかった。

アルムや梨尾、パパやママ、色んな人が泣いたがアタシは泣かなかった。

アタシを哀れむ人もいたがちっともその人達の言葉なんて耳に入らない。

学校も休んだ。食事も喉を通らず、ろくに眠れない日々が続いた。それでもアタシは泣かなかった。

しまいにはどんどん衰弱していくアタシが今度は医者に診てもらった方がいいという話にまでなった。

だがある日、ふと流れていたテレビからの曲を聞いてアタシは反応する。

その曲をピアノで弾いていたのは麗尾が憧れだと言っていた演奏家だったのである。

安らげるはずの音色。だけどアタシは安らぐ事ができない。

——ああ、そっか——。

アタシは腹立たしかったのだ。

今まで生きてきて味わうどころか想像もできないような腹立たしさ。

その腹立たしさの前では泣かないプライドなどとてもなくちっぽけな程。

「…ずるいよ…」

つ…とアタシの頬を涙がつたう。

「神様は…ずるいよ…。…なんで麗尾みたいにピアノで感動させられる人を傍に置きたがるの…。」

それだけ言うとは何も考えられなくなった。

ただ泣くだけ。

声を上げて、泣いた。

今まで泣いた事もないようなアタシがはつきりと自分の意思で泣いた時だった——。

「：まあ、こんな事があって」

アルマとアルムは語りを終えた。

「お姉様は麗尾ちゃんの楽譜で必死にピアノを覚えたんですのよね？」

「うん、麗尾の演奏を忘れないためにね。完全に再現するのは無理だけど、演奏の雰囲気はそうしないと覚えてられないから。ほら、アタシ馬鹿だし」

あはは：と笑うアルマ。

「ま、麗尾に言われたヒーローって言葉は馬鹿なアタシでも覚えていられたけど。まあだからアタシは：困っている人の為に盗みをする怪盗の夢を諦めきれなくなったんだよねー」

「アルマさん！」

突然アルマの手を取るライブ。

「アルマさん：頑張ろうね。麗尾さんに恥じないくらい：」

手を握られているアルマは少し驚いたが、ライブの言葉に頷く。

「まあライブさんとそよぎさんのおかげで今、こうして怪盗仕事やっ
てられるし：頑張るにゃ」

ライブはうんうんと頷く。

その夜――。

そよぎの提案でトラック業者を使ってまでそよぎ邸の地下室に運ばれたピアノの音色がそよぎ邸に響いた。

――安らかに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1597g/>

交錯『裏』逸話

2010年11月15日08時12分発行